

# 「力の流れは水の流れ」

## 構造家・磐田正晴

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco



### ■ 松井源吾とともに

構造家の磐田正晴さんは、松井源吾先生の愛弟子である。早稲田大学理工学部理工学研究所（松井研究室）を修了した昭和45年に、O. R. S.事務所（松井源吾が主催する構造事務所）に入所。他の弟子同様に、「僕のところは3年はいて欲しいがそれ以上いても困る」といわれたそうだ。が、請われて取締役になり7年間に在職する。事務所時代から始めた早稲田芸術学校の講師を30年間続け、その後早稲田大学講師を3年勤めた教育者でもある。

振動学が卒論だが、松井研究室の仲間うちでは「院生の吹き溜まりだな」と皆でおどけて言っていた自然風の構造物に対する風圧力などの研究するチームで風と取り組むことになった。松井先生の意地を感じるオフレコのエピソードがあって始めたのが、高度な実験技術を伴うこの研究だったという。算盤と計算尺の時代だったから、夜を徹して格闘したそうだ。先生から教えられたことを言葉で表すと、「間違ったところはすぐに直せ!」「構造とは力の流れは水の流れと心得よ!」だったと、遠い目をする磐田さんです。

### ■ 師弟の絆

松井先生の意向を肌で感じながらもO. R. S事務所

を辞して、MUSA（ムーサ）研究所を設立した。MUSAとは芸術を表すラテン語だ。ロマンあるネーミングが磐田さんの個性と心の内を語っているようだ。黒川紀章建築都市設計事務所や香山壽夫建築研究所と協働した建物が多い。今もさまざまな建築家と組んで、精力的に事務所を運営している。公共建築賞やBCS賞など複数の受賞歴があり、「二宮のアトリエ」（設計：阪根宏彦計画設計事務所）では第14回松井源吾賞を受賞した。

松井源吾先生はパッと見た感じは怖いですが、面倒見がよくて人気のある先生だったという。高田馬場の「早稲田ボウル」で学生たちにランチを振る舞うこともあった。独立して忙しくしているMUSAの磐田さんのところにフラリとやってきて、ビールから始まる食事が深夜に及ぶ日も少なくなかったとか。深夜に自宅まで先生を送って、長い1日を終える律儀な磐田さんの姿が思い浮かぶ。覇志堂も松井源吾先生のお酒にまつわる噂が本当だったと再認識したのでした。

### ■ 信念

磐田正晴さんは癒し系の風貌と語り口の持ち主で、話を盛り上げるのも上手い。建築を選んだのは「映画の摩天楼を観たからですよ」と陽気に答えた。モノクロ時代のアメリカ映画だ。ゲーリー・クーパー演じる主人公の建築家が、自分が設計した摩天楼の頂で誇らしげに風に吹かれているというラストシーン。高校生の磐田さんは「建築で生きる!」と一念発起したのでした。「どこかの構造家と同じことを言っているらしいのですが」とお茶目。そして、「客観的に良いか悪いかわかる構造が性分に合う」と進路を絞ったのでした。

生涯現役を貫いた師匠の年齢までは、現役でと決めている。節目ごとに松井宅へ挨拶に連れて行った3人の子供達もそれぞれの道を歩み、ゼネコンで土木エンジニアとして活躍中の長男がいて、週末は鴨川に建てた別荘に妻と赴き囲碁三昧という日々。行くのが遠のくと、仲間たちが磐田さんとの対局を待つという。そんな結構な生活を送る磐田さんだが、「独立して5年くらい後から、親の介護が始まり18年間続けてきた」という月日があった。夕方以降の仕事はできなかったから「スタッフ達には迷惑かけた」と振り返る。今、バリバリと仕事をする構造家・磐田正晴さんはその名前に恥じない真実の人なのだ。